

五返舎半九？

飯田良樹

皆さんは、弥次さん喜多さんが旅する『膝栗毛』をご存知でしょう。作者は十返舎一九です。

『膝栗毛』の『東海道中』シリーズは、1809年（文化6年）の第8編（大阪見物）で一段落しましたが、1814年（文化11年）に、旅立ちの発端（はじまり）の編が、追いかけて書かれ、序編が最後に出版されています。さらに後続の『続膝栗毛』シリーズが書かれて、弥次喜多は、金比羅、宮嶋、木曾、安曇野、善光寺、草津温泉、中山道へと旅をします。『続膝栗毛』は1810年（文化7年）から1822年（文政5年）にかけて刊行され21年後にようやく第12編で完結しました。続いて日光東照宮に向かう『続々膝栗毛』も書かれましたが、こちらは作者の死去により未完に終わっています。

旅籠や旅日記を調べている関係で十返舎一九の『膝栗毛』も収集しています。中でも5編上下追加の3冊は伊勢参宮街道の話で地域名が出てきてよくわかり面白いです。



文章はヘンタイカナで読みづらいですが、挿絵は独特で楽しいです。

昔の人はこんなヘンタイカナが、よく読めたなど思っていたら、古文書会を開催していた叔父より、江戸時代中期頃より各地区に寺子屋が沢山出来て、同じ崩し方で書かれた往来物（教科書）を使ってヘンタイカナを習ったので、書物や古文書は同じ崩し方で出版されたり書かれたりしていたので読めた。でも明治以降のヘンタイカナは各自の個性が出てきて読み辛かったと言っていたのを思い出しました。

十返舎一九も往来物の『伊勢参宮往来』を出版し

ています。（往来物は読みやすいように一字一字が大きく、漢字にはふりがなが振ってあります。）



『膝栗毛』には、もう一つ『方言修行 金草鞋』と名付け、各地を旅した道中物があります。

『膝栗毛』は絵と文章が別々の頁になっていますが、『方言修行 金草鞋』は絵と文字が同じ一枚に摺られています。

絵が『膝栗毛』とは違っているなどと思ったら、林美一『かねのわらじ』によると、十返舎一九が自筆自画（国立国会図書館蔵）で原稿を作り、本の絵は喜多川月磨（墨亭月麻呂）が描いていると書かれ、十返舎一九の原稿が提示されています。



喜多川月磨の『金草鞋』 十返舎一九の下絵

ここまでが前置きで、本題の五返舎半九に移ります。以前に『道中ゆきかいぶり』なる一枚物を入手しました。





道を行き交う座頭や馬子などが『膝栗毛』などと同じ作風で描かれて、最後に五返舎半九歌と書かれています。当時は十返舎一九が酔狂で自分の号をもじって書いたのかなと思っていました。

今回、版本ではなく手書きの木曾街道を描いた『続膝栗毛』2冊を入手いたしました。

(木曾街道は『続膝栗毛』第3~6編で私が持っているのは6編上下2冊です。なお、版本『続膝栗毛』6編は早稲田大学図書館データベースを引用しました。)



五返舎半九「信濃屋」

版本「木曾屋」



画風は『膝栗毛』シリーズと同じですが、挿絵には彩色が施されています。挿絵の茶店看板が五返舎半九では「信濃屋」、版本では「木曾屋」となっています。下巻の最後に「跋」（あとがき）が書かれ、門

人五返舎半九誌となっています。(版本には跋が掲載されていません)

門人？十返舎一九に、同門か弟子がいたんだと、やっと気づきました。慌てて調べてみると、

1784年(天明4年)生まれ。浄瑠璃・滑稽本作者であり、江戸の芝で菓子商を営んでいました。十返舎一九の門人となり、のちに深川に移転します。別号は銀鈴亭半九。

十返舎一九の弟子には彼の他にも十字亭三九、九返舎一八といった師匠の名をもじった弟子がいましたが、結構適当な弟子が多かったそうです。その中で五返舎半九はまともな方だったようです。

1858年(安政5年)のコレラ流行で8月6日に亡くなっています。

福聚寺(保土ヶ谷)に残る過去帳によると本名が水野與平治であり、娘のきくが港崎町の妓楼「橋本楼」を経営する橋本氏の後妻であったことが墓碑に刻まれているとの事です。

作品は『落噺仕立おろし』『秋葉街道似多栗毛』『無如在怪談』『奴五斗米名誉滝水』『鼠盤十二子金銀』『化物大福餅』『桃太郎宝撰取』などがあります。

前にも書きましたように、物事を調べていると以前に調べた事に繋がっていく楽しみを味わっています。



五返舎半九の詩が入った挿絵